

連載 オブジェクト指向と哲学

第 83 回 デカルト、炉部屋の夢(2)

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

街を歩きながら考えた。これは現実なのか、それとも夢の中なのか、どのように判定すればよいのか。ビルのガラスに太陽光が反射して思わず目を細めてしまう。夢で眩しいと思ったことはない。車の騒音がする。夢で音は聞かない。だから夢ではない。

夢は眼を閉じているのに「見る」という。確かに画像として現れるが、覚醒時に目から入ってくる光から認識できる画像とは違う。眩しいと感じるのは感覚器官としての眼であり画像としてまだ認識される前なのだ。夢は本来感覚器官とは関係ない。眼・耳・鼻・舌・身体の中の五つの感覚器官は半分覚醒状態の夢うつつ状態でない限り、無意識の夢の中では働かない。半覚醒夢と純粹夢とでも呼んで区別すべきか。

●デカルトの判定法

デカルトは、自分は今夢を見ているのではないか、どうして現実と言えるのか、かなりしつこく疑う。

--

いま私がこの紙を見つめている眼は、確かに目ざめたものである。私が動かしているこの頭はまどろんではない。この手を私は、故意に、かつ意識して、伸ばすのであり、伸ばすことを感覚している。これほど判明なことが眠っている人に起こるはずはないであろう。とはいえ私は、別の時には夢の中で、やはり同じような考えに騙されたことがあったのを、思い出さないだろうか。

これらのことを、さらに注意深く考えてみると、覚醒と睡眠とを区別しうる確かなしるしがまったくないことがはっきり知られるので、私はすっかり驚いてしまい、もう少しで、自分は夢を見ているのだ、と信じかねないほどなのである。([1] p26)

--

デカルトはどのように判定したのか。省察 1 で上のように問題提起しているが、省察 6 で次のように結論付けている。

--

夢は、覚醒時に現れる事がらとはちがいで、生涯の他のすべての活動と記憶によって結びつけられることがけっしてないのである。

(省略)

それがどこからやってきたのか、どこにあるのか、いつやってきたのかを私が判明に認めるような事物、その知覚をなんらの断絶もなく、残りの全生涯に結びつけることのできるような事物が現れる場合には、それらの事物が、睡眠中ではなく覚醒時に現れているのだということを、私はまったく確信するのである。さらにまた、それらの吟味のためにすべての感覚、記憶、悟性を動員してみたうえで、これらのいずれによっても、他のものと矛盾するようなものが何一つ私に知らされないならば、私は、それら事物の真理性についていささかも疑うべきではないのである。なぜなら、神は欺瞞者ではないということから、そのような事がらにおいて私はまったく誤らない、ということが帰結するからである。([1] p133)

--

つまり覚醒時にはこれは夢でないとは判定できる。夢の中でこのようなことを考えてこれは夢であるなどと思うだろうか。

●アレゴリー

インスピレーションの例として前回挙げたモーツアルト、ケプラー、ラマヌジャンの場合はすべて直接的にその意味内容は当人に理解できた。デカルトは、3つの夢の意味内容は直接的には理解できず解釈に時間をかけます。

デカルトの夢は直接的には意味がわかりません。そこになんらかの隠されたメッセージがある筈にちがいないと考えます。夢解釈のキーワードは「アレゴリー」です。

--

広辞苑：

喩（たとえ）。比喻。諷喩。寓意

特に、18世紀以降象徴と対比して用いられ、それ自身の形象的価値よりも、他の観念を一義的に示唆するための単なる機縁や記号として機能するものとされる。

明鏡国語辞典：

寓意。諷喩。また、たとえ話。寓話。

--

オリムピカというタイトルの羊皮紙製のノートは、ライブニッツも一部分筆写し、それが残されています。[2] p156

--

感覚的事物はオリムピカ的なものを概念することを可能にする。風は霊を、持続する運動は生命を、光は認識を、熱は愛を、瞬間的活動は想像を意味する。([2] p156)

--

オリムピカにはもう 1 つの断章があります。

--

想像力が物体を概念するのに図形を用いるように、知性は精神的なものを表象するのに、風、光といったある種の可感的なものを使用する。このようにして、われわれはより高度な仕方哲学し、認識によって精神を最も高い所まで導くことができるのである。[2] p157

--

●第一の夢

『1619年11月10日の夜、一日中「炉部屋」にこもって思索にふけっていたデカルトは、「この日、驚嘆すべき学問の基礎を発見したという思いで心を一杯にし、非常な興奮に充たされて眠りにつき、一晩のうちにつづけて天から来たとしか思われぬ3つの夢を見た』 [2] p128

--

彼は道を歩いている。そこにはいくつかの幻影が現れて彼をおびやかす、右側から来るその圧力のため、なおも目的地に向かって進もうとすれば左側に体を傾けざるを得ない。

(省略)

すると烈しい風が吹いてきて彼をその渦巻きの中に巻き込み、左足の上で数回転させる。[2] p129

(以下省略)

--

彼はその後なんとか学院にたどり着くのですが、烈しい風でよろめきそうになります。そこにいる人たちはみな平気な顔で立っています。[2] p129

デカルトは「これは彼を誘惑しようとする悪霊の仕業ではなかったのか」と恐れ、夢から覚め

て激しい不安に襲われる。[2] p130

●第二の夢

2時間ほど夢について考えたのち眠りにつきます。

--

夢の中で雷鳴のごとき音に驚かされて跳び起きると、部屋の中にたくさんの火花が降ってくるのが見えた ([2] p131)

--

この音は夢の中なので耳で聞こえたものではないのであろう。また火花も目覚めたときに覚えている夢の記憶であり眼で見たものではないだろう、と思います。

これが夢だったと確認し、また眠りにつきます。そこで最も重要な第三の夢を見るのです。

以下次回...

参考書籍

[1]デカルト、【訳】井上庄七／森啓／野田又夫、省察／情念論、2002、中公クラシックス

[2]田中仁彦、デカルトの旅／デカルトの夢、2014、岩波現代文庫